

# 小右記の「覧」とその語彙

穂 田 定 樹

一、 「覧」の意味・用法とその問題点

二、 「覧」の語音

三、 「覧」語彙とその語義

四、 「覧」語彙の待遇性

小右記の「覧」は、一字漢語サ変動詞である見込みが強い。その大半が内覧の職権ないしは職務の行使・執行の意を担って頻用せられ、「内覧」「奏覧」などの二字漢語サ変動詞とともに、「覧」語彙として、令制官制語彙の重要な一面を構成している。したがって、それらの語の意味構造は令制機構を如実に反映し、いきおい、各語には、ある種の待遇性が付随しているのが認められるが、「覧」それ自体の待遇性は、前敬語的な段階にとどまったと考えられる。

## 一、「覧」の意味・用法とその問題点

小右記に見られる漢字「覧」の文例を、想定される語義に基づいて類別してみると、まず一つには、その意義が、「みる」という動作概念に集約される一群がある。この群の「覧」は、行為の対象や、それによって自動的に特定されることも多い行為の質などによって、種々な様相を呈している。

① (円融院観桜ノ御幸) 御御車、覧西山花、……先覽大井、於河辺御御馬覽寺々、「寛和元・三・一六」

② 又僧上(『慶円』)云……(三条天皇) 御夢覽吉相、是宝位可無動之事也、俄召被仰此事、再三被悦仰者。「長和二・七・四」

③ (三条天皇) 御目快不覧、雖有御覽御馬之名、実は似不慥覧。「長和四・六・五」

④ (旬政、五府奏。大臣ガ) 膝行奉奏……天皇覧了、如本結書、置給東置物御机「長徳元・一〇・一」今日令掘堂井、不及遣水沸出、即臨覧、大有興、「長元元・一一・七」

⑥ (橘内位朝臣、除目ニオケル愁文持参) 申云……訴申神明之祭文、令覧諸卿了、参神社可訴申、

者。「寛仁三・一・二六」

⑦ (宰相資平) 来云、大殿(『前太政大臣道長』)被召載御車後、坐土御門第、覽造作、「寛仁二・閏四・一二」

①や⑤は、対象をたのしんで享受しようとする広義には娯楽的行為であり、宮廷の年中行事となつた童舞、相撲、騎射の諸芸をみることもこれに類すると言えよう。②③は、より日常的な生活行為。特に③は、視覚の健全・正常な生活機能の能非に属する、最も基本的な見る行為である。これに対して④⑥⑦は、職務・職掌として検分することを意味する用法で、その行為は多分に法規的であり、知的でもある。しかし、これらの用法の限りにおいては、「覧」を、「みる」「みたまふ」、場合によっては「みそなはす」等と読むことに重大な支障はないかもしれない。しかし、次の⑧や⑨の「覧」についてはどうであろうか。

⑧ 右府(藤原為光)……候御前円座、有僧綱召、……僧綱召及座主書二枚、撒硯等、納柳筥、進簾前、覧太相府(藤原兼家)、了退復座、見給了、自簾中被指出。「永祚元・一二・二七」

⑨ 大外記敦頼朝臣来云、今日叙位議始、小勘文土代(『下書キ)、昨日覧左府(『藤原道長』、今日清書持参、者。「寛弘八・一・五」

この「覧」には、「見せ示す」もしくは「見させる」意を想定しなければならぬまい。そして、一字漢語サ変動詞として、「ラン（ム）ズ」「ラン（ム）ゼシム（サス）」と読んだのではなかったか。また、「覧」をそのような字音語とする解釈を、①⑦にも及ぼすことは、できるのか、できないのか。「覧」の語義、語性を探り出し、その語彙を把握するためには、こうした、語音（語としての音韻形態）確定の問題が先ず存在する。そして、この問題の解決には、たとえば、「覧ぜしむ」の「しむ」が表す使役行為の主者、対者など、その意味構造の解明や、太政官の首席大臣に対する待遇表現としての適否、といった問題も連鎖的にからんでくるであろう。本稿は、そのような「覧」に関する問題点を、できるだけ相互に関連づけながら追求し、その語彙構成を考えることを課題とする。漢語の移入に関する基礎研究の一環となることを期してのことである。なお資料としては、大日本古記録の小右記を用いたが、その所収伝本の別をまでは示さない。また、課題への影響はないと判断した場合は、本文中の割注を省略し、漢字も当用漢字体を用いた。

## 二、「覧」の語音

本節に述べるのは、前節に問題提起のような形で言及し

たが、「覧」は字音語なのか、訓読語なのか、という問題である。しかし、小右記に限らず、漢字専用の古記録から用字の音訓を示す物的証拠を見つけ出すことは至難のわざであること、言うまでもない。この小考においても、少なくとも、例⑧⑨のような、内覧の職権や、職務に関する「覧」は動詞としても字音語であった、と考えられる、その情況を探り出すことにとどまらざるを得ないであろう。なお、内覧とは、太政官から天皇に奏上し、勅裁を得て、発給・執行すべき行政文書を、奏上に先立って、関白や太政大臣が検分する職権や職務、またはそれに準ずる検分の行為をいう、とするのが史学的解釈のようであるが、小右記などでは、むしろ、上卿、あるいは内弁の命によって、藏人頭や弁官などが、関白や太政大臣などのもとに赴き、文書の検分を要請する行為を「内覧（す）」と称する事例の方がはるかに多い（次節参照）。そして、前掲例⑧や⑨あるいは次に挙げる文例⑩などに見られる「覧」「令覧」も、文意上は、右に言った「内覧（す）」と同じ行為を意味して、官制語彙の一面を構成していると見られる。

- ⑩ 大臣（右大臣顕光）云、……（固関官符）先可覧  
左府、但勅符相共可令覧、者、〔長和五・一・二五〕

また、分析的には、これらの文例の「覧」や「令覧」の

「覧」は、史家の言う内覧の行為、職権・職務としての文書検分の行為を語義ないしは素材的事実とし、この点でもこの種の「覧」は、官制用語と言うにふさわしい。そして、少なくとも、官制用語の「覧」は、「ラン（ム）ズ」を語音とする一字漢語サ変動詞としてあり、訓読語ではなかっただろう、とするのが本稿の考えであるが、その推定は、以下に述べるような事どもによつて裏づけることができる。

1 官制用語の「覧」が字音語であることによつて、訓読語「見る」との差違が顕著鮮明になると解釈される事例が認められる。たとえば、前掲例⑧は、上卿の右大臣藤原為光が、太政大臣兼家の簾前に進み、僧綱召等の文書を、最も端的な言い方をすれば、兼家に見させようとした、つまり、史家のいう内覧を兼家に要請する場面であ

る。「覧太相府」の「覧」は、その要請の行為である。そして、その直後の「見給了、自簾中、被指出」の「見給」も、同じ兼家の、同じ文書の、同じ内覧であるが、要請する段階での「覧」と、文書を渡し終えて上卿も御前を退き、復座して後の、内覧終了の時点での「見給」とでは、内覧という公事の政治的意味についての認識も、それに付随する緊張感や厳肅感も、ずいぶん異なるはずである。「覧」も「見」も、同じく「見しむ」「見たまふ」と訓読したのでは、その落差はきわめて不鮮明なものに

なるであろう。やはり、「覧」が字音語であつてはじめて、その落差を計算した叙述が可能であり、この「覧」が「ラン（ム）ゼシム」である可能性は高い。要するに、「見」との異なりをきわだてるためには、「覧」が字音語であることが必要な状況があつたということである。

2 これも「見」との関連であるが、史家のいう内覧の行為の主者は、当然の事ながら、令制官僚の最高位者であり最高権力者である。単純な「見る」意の「覧」を併せても、「見」と対照するとき、その行為の主者の階層は、高きにかたよる傾向が強い。この情況の詳細は四節に譲るが、そういう情況にあつては、「覧」が字音語であつた可能性がより高くなるであろう。字音語であることによつて、その行為の主者たちの特権的な階層であることが、より効果的に象徴されると考えられるからである。その意味では、「覧」は、広義の美化語であつたかもしれない。

3 例文⑩（前掲）に見える「可覧左府」の「覧」は、直後の「令覧」と同義に、「ランゼシム」であつたろうとする解を、さきに述べたが、官制用語の「覧」の多くは、単なる見る意の「覧」に対する他動詞、見せる意の「覧」と解することもできる。

⑩（大嘗会関係諸勘文）可奏聞之由、示左中弁了、

但、可覽大臣之文、各可覽左府、即、以此旨、含  
左中弁、「寛弘八・八・二六」

- ⑫ (除目) 密々、有被奉之書、不知何事、(太政大臣頼忠ガ) 入懷中、奉覽也。奉覽之後、可令破給之由、被奏也、「天元五・一・二二」

このように、同一形の語に、自動詞的意義と他動詞的意義とが対照的に併存する現象は、むしろ一字漢語サ變動詞によく見られる現象である。具す・和す・減ず・現ず・生ず・成ず・損ず・治す・通ず・任ず・拝す・倍す・變ず・滅す、など。「覽」の、上のような自他両義併存の想定が可能であることも「覽」が一字漢語サ變動詞であることのあらわれであつたと考えられる。

4 二字漢語サ變動詞として「御覽ず」が、早く竹取物語、古今集・雑上の詞書などにあり、源氏物語にも盛んに用いられている。小右記には次のような名詞「覽」の事例もある。

- ⑬ (万機旬・奉奏) 立御屏風後、伺覽不。「永観二・一〇・一七」  
⑭ 去夕持参兩殿。経覽、被驚嘆。「万寿二・七・二五」

字音語「覽」が一字漢語サ變動詞として用いられても不思議ではない状況が、すでに熟していたと見られる。

### 三、「覽」語彙とその語義

字音語「覽」は、「覽」を語基とする合成語々彙に取りまかれて在る。その数は必ずしも多いとは言えないが、小右記に次のような語が見られる。漢語である性質上、ほとんどが名詞であると同時に、動詞(サ変)としても用いられる。

○覽 (被覽 奉覽 令覽)

○遊覽 歴覽

○觀覽 天覽 ○御覽 御覽煩

○奏覽 啓覽 進覽 召覽

○覽筥

これらの中で、特に官制用語として多用されるものの語義について、多少の考察を加える。

- ⑮ 撰政(兼家)、以余、被聞左府(源雅信)云、今日宣命事可被行、者、即申事由、左府、以内記、(撰政ニ)令覽宣命(以頭藏人、可被覽歟云々)

「永延二・九・二〇」

- ⑯ 今日坊官除目、仍参内、内大臣(公季)在陣、定御即位親王已下職掌、以藏人頭資平、令覽撰政(左大臣道長)「長和五・二・三」

- ⑰ (内大臣公季) 以藏人左少弁経頼、被覽左大臣(道長)。経頼不納宮欲令覽。卿相云、納宮可令

「令覽」は、前節によって言えば「覽ぜ・しむ」または「覽ぜ・さす」であり、「しむ」の意味する使役の行為の主者は、通例は、「令覽」の主語として登場する僉議や儀式の上卿あるいは内弁である。文例⑮に即して言えば、左大臣源雅信、⑯⑰では内大臣公季。その意を体して、検分の主者のもとに赴き検分をしてもらう人物が、「以藏人頭資平」のような形で述べられる。但し、例⑰では、言わば上卿の代行者の弁官経頼を、「欲令覽」の主語にした変型をとっているが、実質は内大臣公季が使役の主者である。使役の対者については、解が二様にわかれる。解Ⅰは、文書検分の職権を持ち行使できる、関白、太政大臣、摂政、またはそれらに準ずる人。すなわち、「令覽」とは、文書を「見させる」「検分させる」意であり、その「覽」は、検分権者の検分行為「見る」意のものとなる。ただし、早く、古今集や源氏物語に例を見る「御覽ぜさす」のように、後項「覽」が敬語化していない限り、検分権者に対する待遇表現として、不足するところがある。もともと、使役の主者にも⑰の外は無敬語で「令覽」と言い捨てており、それが記録体の文体とも考えられ、検分権者といえども、天皇の支配下にあり、とする認識のあらわれとも言えるが、とにかく、「見させる」「検分させる」は単なる事がらの論

理だけの言語化であって、実際は、もっと和らかな意味で理解していたのではなからうか。その意味から、前節でも、検分を要請する、というように意識してみたのである。

使役の対者についての解Ⅱは、検分権者のもとに差遣される人物。太政官の中・下級官吏である。したがって、無敬語であることに一向支障はない。この場合、「令覽」は見せさせる意、その「覽」は、検分の対象となる文書を見せる、という、見るに對しては他動詞的な意を表すことになる。この「覽」の語義は、前節に述べたように、可能性のある語義である。そして、例⑮や⑯にこの解を適用しても、支障はないように見える。この解Ⅱを、むしろ積極的に支持するかと思える。

⑱ 清書、令資業覽摂政、「寛仁元・八・九」

⑲ (大内記) 義忠、進宣命草、令経頼覽摂政、有可令清書之報、「寛仁元・一一・九」

のような事例もある。しかし、⑰の、「経頼不納宮欲令覽」に適用すれば、自分で自分を使役しようと思うことになる。

⑳ 左中弁云送云、給大宰之官符、令覽摂政殿了、

「寛仁三・五・三」

㉑ 件宣命趣、以経頼令申摂政、帰来云、(摂政ハ)

只今被休息、令覽宣命草之次、可申案内、者、

これらの例に解IIを適用しようとしても、自己使役という、あり得ぬ事の表現になってしまうであろう。これらについては解IIは成立しなと言わねばならない。そして、「令覧」の意味をできるだけ統一に解するとすれば、解Iを採らねばなるまい。

「覧」単独の使用例についても、同様な解が成り立つ。

②② (上卿、左府雅信。文章得業生試等ノ判文ナド)

付下官 (藏人頭実資)、先覧大相府 (頼忠) 「天元

五・四・三〇」

②③ 大宰報符草、今朝見之、有改直事等、可覧撰政之

由、相示左中弁了、「寛仁三・五・三二

①⑩ (右大臣云) (固関官府) 先可覧左府、但勅符相

共可令覧、者、「長和五・一・二五」

②④ (諸社幣料ノ官符ナド) 以右少弁資業、奉覧撰政、

即返給云、可令請印、者、「寛弘八・八・二六」

②⑤ (上卿左大臣頭光、季御統経僧名定文ヲ) 以藏人

頭左中弁定頼、被覧撰政。「寛仁三・二・二三」

右に列挙した官制用語の「覧」は、一つには、例⑩など

によって、「令覧」と同義同語と考え、「しむ」または「さ

す」を読み添えて「覧ぜしむ・覧ぜさす」と読むことができ

る。その場合、「覧ず」の意味、「しむ・さす」の意味、

いずれも「令覧」に同じである。また別に、右例の「覧」一字の表記については「覧ず」と読み、かつそれを、「見る」意の「覧ず」に対する「見せる」意の他動詞「覧ず」(同形の漢語サ変動詞)とすることもできる。その行為の主者は使の弁官や藏人頭(実質的には上卿)。本稿では、そのいずれであるかを決定するまでに至ることはできなかった。

ところで、「令覧」「覧」と近似した意味構造を持つ語に「内覧(す)」「令内覧」がある。「内覧」は、名詞としても、二字漢語サ変動詞としても用いられている。

②⑥ 内覧件文(主税寮大勘文、即被許容「容」底本

「答」之人、是又左府(道長)、今又発咎之人左

府、太奇事也、「長和三・一・二三」

②⑦ 敦頼(大外記) 答云、以未奏覧之書、可経内覧歟、

「長和元・五・二」

「内覧(す)」は、右例などによれば、関白や太政大臣などの職権・職務としての文書検分行為を指すと見える。しかし、さきに「覧」「令覧」などに指摘した検分要請の行為と解する余地も多分にある。角川古語大辞典にあげた、検分行為の意の「内覧」の用例、

②⑧ (年爵、封戸下賜ノ) 勅書、下給中務、……件勅

書内覧、大内記義忠、宿所持草・清書、「御堂関

白記・長和五・六・一〇」

これは②⑥と同じく動詞「内覧す」と見られるが、これにも、「大内記義忠宿所持草・清書」を内容とする検分要請の行為と解する余地はある。

しかも、小右記や同時代の古記録においては、動詞用法と言わず、名詞用法と言わず、検分行為自体を指している「内覧」の語は確認し難く、逆に、検分要請の行為を指すと考えられる語の「内覧」が圧倒的に多い。

- ②⑨ 先取具件文書等、見行事上卿、次、内覧左相府、次経奏聞（左中弁経通へノ指示）「長和三・四・一五」

- ③⑩ 以権左□、令内覧へ召膝突、仰可内覧由「治安元・一一・二八」

「左中弁重尹ヲ以テ関白ニ内覧ス」といった文型が認められるほどである。小右記以外の文献にも、次のような例が見られる。

- ③⑪ 召余（左中弁経頼）令内覧給之次、（関白頼通ニ）被申云……「左経記・長元元・八・一二」  
③⑫ 令余被奏、余先内覧、次奏之、「左経記・長元元・一二・二七」  
③⑬ 今日官奏也、戊剋許、右中弁長忠朝臣、内覧二来、「殿暦・長治元・一二・一八」

ただし、右の殿暦になると、検分行為を指している語の「内覧」が、散見するようになる。

- ③⑭ 丑剋許、事了下宿所、清書内覧後、余退出、「康和三・一二・二六」

- ③⑮ 依内覧事、午時許、着直衣参内、於宿所内覧、右中弁長忠覧之、「長治元・一二・一〇」

なお、右の③⑮の「長忠覧之」の「覧」は、先に述べた、見せ示す意の他動詞「覧」であると考えられる。ところで、小右記などの「内覧」が、上述のように検分要請の意で用いられる情況からすれば、その「内覧」の「覧」も、他動詞「覧」であつたと見ることができる。小右記にも見える「奏覧」「啓覧」「進覧」の「覧」も同じ仲間であろう。ちなみに、諸橋氏の大漢和辞典によれば、「説文」が「覧、観也」という、その「観」について、「周礼・考工記」の「釈文」や、「左氏・昭・五」の「注」は、「観、示也」と説いている。「覧」の他動詞的意義の源が窺われる。

「内覧」はまた、「令内覧」の形でも用いられ、「何某ヲ以テ（ヲ差シテ・ニ付シテ・ヲシテ）、関白（太政大臣・摂政ナド）ニ令内覧」という文型になるものが多い。「内覧」の語義が上述した如くであるとすれば、この「令」の使役対象は、右の型の「何某」であり、もちろん、使役の主体は、仗議や行事の上卿である。しかし、この解は、上



述の「令覧」の解において採らなかつた解Ⅱに相当する。

もつとも、解Ⅱ棄却の理由とした、使役の行為が自己使役になる例は、小右記の「令内覧」には見なかつた、とは言え、「令覧」と「令内覧」とが使役の対者を異にすることになる解は、納得できる理由付けができない限り、やはり釈然としない。検分行為自体を意味する「内覧」の用法が「令内覧」に限って確立ないしは保存されていて、「令内覧」も「令覧」と同じく、検分権者に検分させる意と解すべきなのであろうか。それとも、「内覧」の語には、「覧」のように、一般視覧行為を意味することはないから、「令覧」との意味の異なりに牽制されることなく、解Ⅱ担当の意味を持ち得たのであろうか。結論は、もつと広く用例を集めての観察を終えるまで持ち越したい。

#### 四、「覧」語彙の待遇性

「覧」語彙の中で、明らかに敬語と言えるのは「御覧（ず）」である。もともとその「御」は、「御苑」「御寝」「御注」などの「御」と同一の、後項の意味する事物や行為についての天子の管領や所有を示す漢語である。国語では「御」の意味が拡大して、後項の事物や行為の主者に対する一般的な敬意を表す尊敬語としての待遇性を得ている。同型の漢語の中で、いち早くサ変動詞化した点、注目され

るが、小右記の中での、一般的な視覧行為を表す「御覧（ず）」は、ほとんど、天皇、院、女院などに専用されて、最高敬語的に用いられている。

同じく一般視覧行為を意味する「覧」は、一概に字音語と見なすことはできないが、職権、職務の内覧の意の「覧」に類推して、字音語「覧（ず）」を想定するとき、「覧（ず）」が、待遇性に関してどんな特徴を示すかを見てみると、「御覧（ず）」に比べて、「覧」には臣下層の行為の表現であるものが散見し、若干、行為の主者の階層が下降する。稀には後に掲げる例③⑨・④⑩のような、筆者自身の行為を「覧」と書いている例も出る。しかし、天皇をはじめとする皇族層にも用いており、臣下層といえども上流であつて、待遇の対者の身分階層という点では、「御覧（ず）」との間に、対立的というほどの大差は認められない。筆者自身に用いた、例③⑨・④⑩の「覧」は、訓読語「みる」である可能性も高いであろう。

③⑥ (主上) 於清涼殿御前、覧左・右馬寮二坊御馬、  
〔寛和元・四・一七〕

③⑦ (資平) 重来云、大殿、被召載御車後、坐土御門  
第、覧造作、〔寛仁二・閏四・一二〕

③⑧ 右衛門督（藤原懷平、実資兄）覧南泉、有感嘆、  
〔長和三・一・二九〕

③⑨ (典侍) 執御祿賜太弟へ候昆明池御障子後、不能

覧」〔寛仁元・八・二一〕

④⑩ 今日令堀堂井、不及遣水沸出、即臨覧、大有興

〔長元元・一一・七〕

「覧ぜしむ」における「覧ず」の行為は内覧権者の行為である。検分文書を見せ示す意の「覧ず」においては、その行為は上卿の命じ託した行為、さらに言えば、天皇の権威を被り、それに基づいての被支配的代行の行為と解し得る余地がある。したがって、この類を対象に入れても、「覧ず」の行為の主者の階層は、かなり高いレベルを保っていると見られる。次のような「見る」との対照からすると、

「覧(ず)」もまた敬語ではないかとさえ思われる。

④⑪ 左少弁経頼持来……山城国司注進文、見了、示可

令覧大殿之由、〔寛仁三・二・一一〕

④② 可作官符之由、仰弁(左少弁経頼)了、但官符草

可見、又、可令覧入道殿、〔寛仁三・五・一六〕

④③ 法性寺座主へ慶明へ来向云、一昨対面山座主、被

付奏状、其詞云、先覧入道殿、次令見下官、其後

可奉摂政、者、〔寛仁三・八・一四〕

例④①の上卿の立場にあるのは筆者実資と見られるが、「見了」は自らの職務行為、「令覧」の「覧」は、「大殿(道長)」の行為である。④②も「令覧」は同じ。「可見」の

「見」は、筆者の行為「見る」とも、左少弁経頼の行為「見す」とも解せる。④③は、慶明の筆者実資に対する談話の中に慶明が引用する、「山座主(慶円)」の「其詞」中の用語で、「覧ぜしむ」ならば④①・④②と近似する。他動詞「覧ず」ならば慶円その人の行為になるが、他動詞としても「入道殿(道長)」の見る行為を内蔵している、という意味で「覧」と言っているのではなからうか。「令見下官」は、筆者実資が、自らの行為であるゆえに、間接話法的に書き改めたものと見られる。以上いずれも、尊者には「覧」、卑者ないしは卑者とすべき自者の行為には「見」を用いているのである。

しかし、右の三例にしても、真性の尊敬表現をするのであれば

④④ 廿三日、(主上三) 可令御覧神宝之由、示弁了、

〔寛仁元・一一・一九〕

のように、「御覧ぜしむ・さす」を用いることもできたはずである。もっとも、皇族への専用度の高い「御覧」を道長に用いることには、なお抵抗があったのかもしれない。しかし、その事自体、「覧」の上述のような状況も、源氏物語のような和文に比べれば、少なくとも字面の上では、待遇表現において常体を用いる度合の高い記録体であることをも考え合わせれば、なお、「覧」は、前敬語段階にと

どまっていたであろう。しかし、「見」との相違は、右にも見たように、確かであり顕著である。「覧」は、「見」と同義・類義の行為を意味するとしても、官制用語としての使用度の高さの中で、それにふさわしく、そして、「見」などとは、はつきり落差のある語感を、それも恒常的な語感を得ていたのではなからうか。その意味では、広義に美化語と言つてよいかもしれない。後考を期したい。

〔平成八・八・二八〕

